2023年12月2日 第75回舞踊学会大会

「何かになる表現」場面で 自分なりの身体表現をする幼児と 定型的な身体表現をする幼児の イメージと動きの差異と特徴

> 千葉敬愛短期大学 村瀬瑠美

目次

- 1 はじめに
- 2 目的
- 3 方法
 - 3-1 方法の概要

3-2 実験方法

3-3 分析方法

- 4 結果
 - 4-1 全体の結果
 - 4-2 自分なり/定型的な身体表現をする傾向にある対象者群の結果
 - 4-3 結果のまとめ
- 5 考察
- 6 まとめ

引用参考文献

幼児の身体表現

幼児一人一人の感性を尊重し,自分なりに表現することに価値を置くもの (高野, 2018)



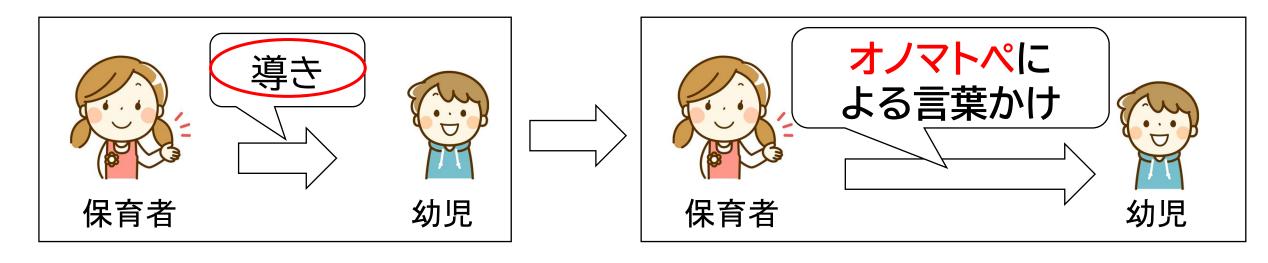
大人によって型や理想の動きが教え込まれるものではない



幼児の自由な表現に重きを置くあまり, 幼児の表現を放置する状況に傾いてしまった (石川, 2013)

保育者は幼児一人一人に対してその幼児ならではの 「自分なりの身体表現」があらわれるように導くことが求められる

1 はじめに



オノマトペは保育における身体表現の実践現場でもよく用いられている

オノマトペは1語で高密度な情報を含むために、1語から想起できるイメージの種類が多様である (Kita、1997)

オノマトペは動きとイメージを結びつける語である(下釜, 2013)

オノマトペをただ言えば幼児は自分なりの身体表現をするか?

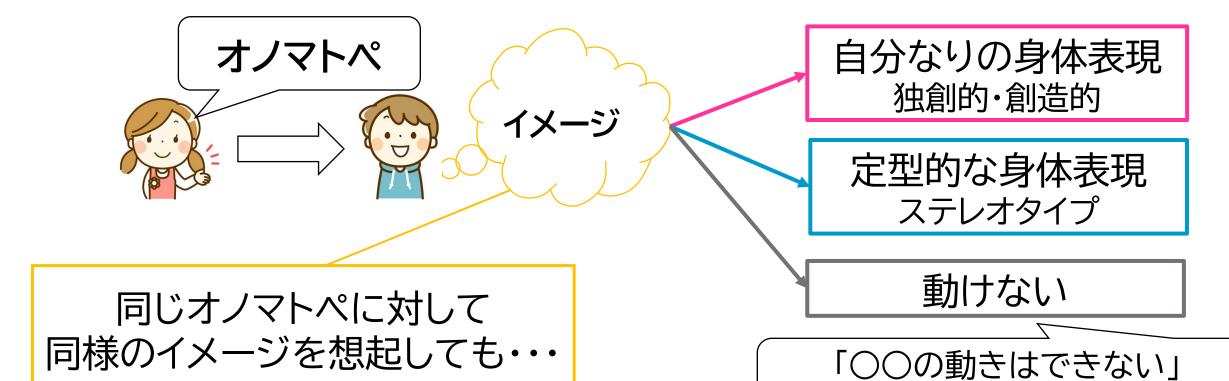




「間違えちゃうかもしれない」

1 はじめに

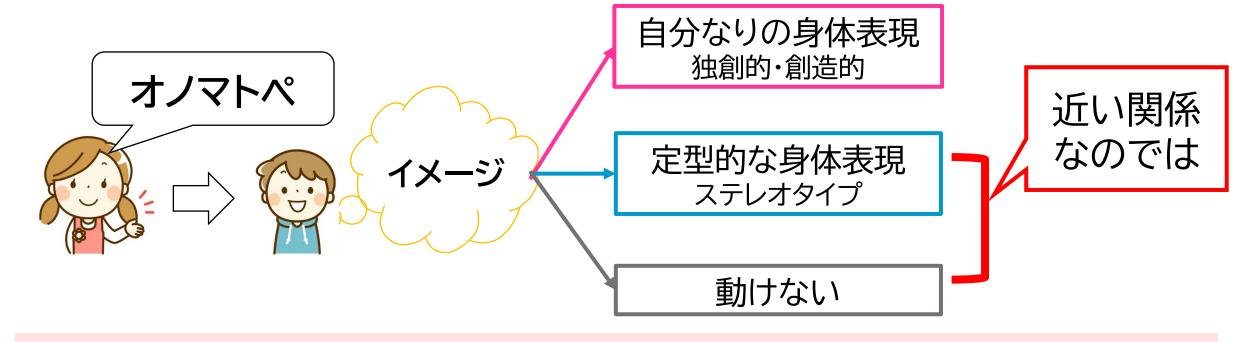
幼児(5歳児)がオノマトペからあらわす身体表現 (村瀬・寺山,2021)



あるオノマトペに対する身体表現に 「正解」「間違い」があるという認識がある幼児がいることが示唆



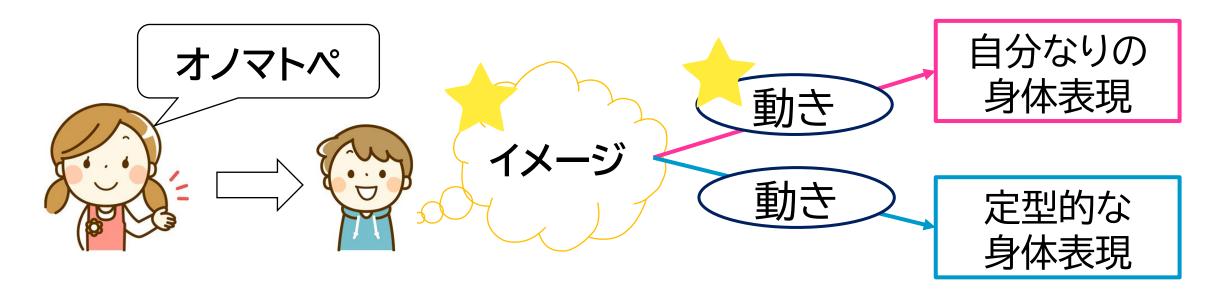
ある動きが幼児の中で「正解の動き」だとインプットされると, 正解だと認識している動き以外は間違っていると思ってしまったり, 正解以外の動きをしようという意志がなくなったりすることで, 幼児の自分なりの身体表現が育まれなくなるのでは



定型的な身体表現に着目

本研究の目的

幼児がオノマトペからあらわす「何かになる表現」に着目し、オノマトペに対して自分なりの身体表現をする傾向にある幼児と、定型的な身体表現をする傾向にある幼児の身体表現の差異と特徴を明らかにする。



対象者

A幼稚園5歳児クラスに所属する年長児13名

男児:4名

女児:9名

日時

2021年7月末~8月上旬

場所

A幼稚園 1階保育室

試技

6種類の意味内容・性質の違うオノマトペ

村瀬・寺山(2020)を参考

具体的な事物を イメージしやすい

ぴょんぴょん

ざあざあ

ぶーん

状態や感覚を イメージしやすい

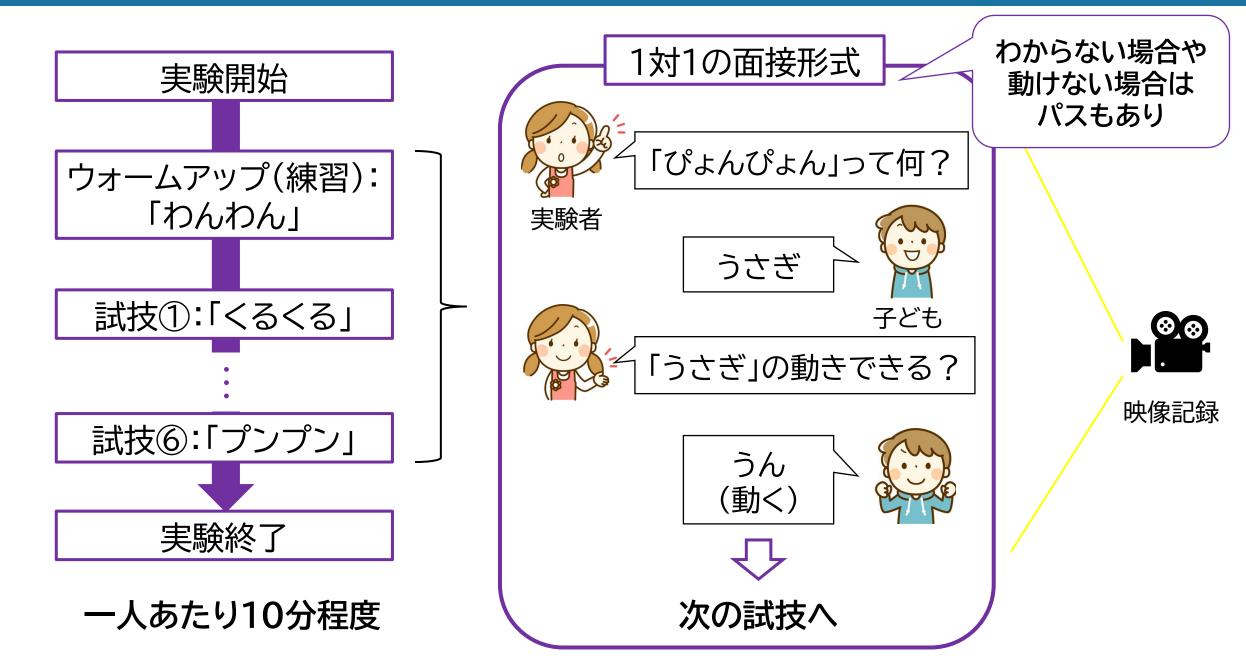
ぴかぴか

ぶんぶん

動きそのものを イメージしやすい

くるくる

3-2 方法:実験の手順 村瀬・寺山(2020)を参考



3-3 方法:分析方法 村瀬・寺山(2020),鈴木ほか(2002)を参考

対象者一人一人の実験映像

イメージと動きがどちらもあらわれた試技



何かになる表現を抽出 (村瀬・寺山, 2020参照)



身体表現を観点ごとに3点満点で評価

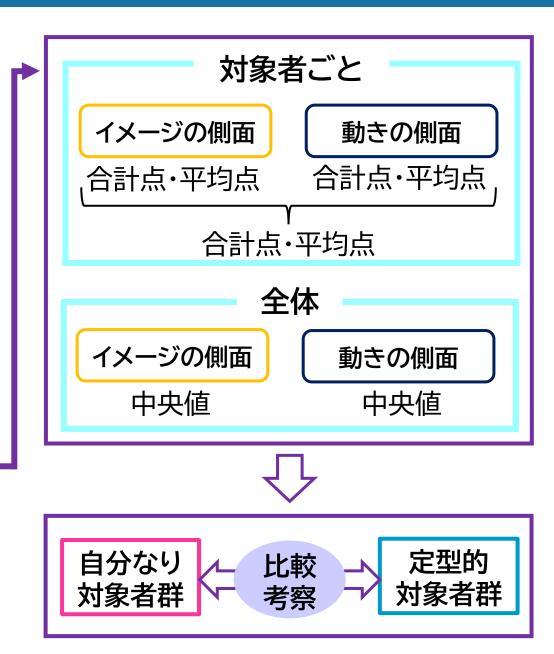
鈴木ほか(2002)

イメージの側面

イメージの独自さ・イメージの具体化

動きの側面

動きの変化・動きの確かさ



4-1 結果:全体の結果

13名への実験:全77試技



何かになる身体表現:48個

全対象者ごとの身体表現数・観点ごとの点数

対象者	身体表現 数	イメージの側面		動きの側面		イメージと動き	
		合計	平均	合計	平均	合計	平均
Α	7	99	2.36	93	2.21	192	2.29
В	2	12	1.50	19	2.50	31	2.00
С	5	73	2.43	74	2.47	147	2.45
D	4	52	2.17	71	2.96	123	2.56
Е	3	26	1.45	22	1.22	48	1.34
F	2	16	1.33	13	1.08	29	1.21
G	3	27	1.50	24	1.33	51	1.42
Η	2	23	1.64	19	1.36	42	1.50
I	5	65	2.17	69	2.30	134	2.23
J	1	6	1.00	6	1.00	12	1.00
K	5	41	1.37	31	1.03	72	1.20
L	5	43	1.43	48	1.60	91	1.52
М	4	24	1.19	20	1.00	44	1.10
平均	3.69	39	1.66	39.15	1.70	78.15	1.68
中央値	4	27	1.50	24	1.36	51	1.50

イメージの側面の中央値:27点動きの側面の中央値:24点



対象者のそれぞれの側面の平均点から散布図を作成

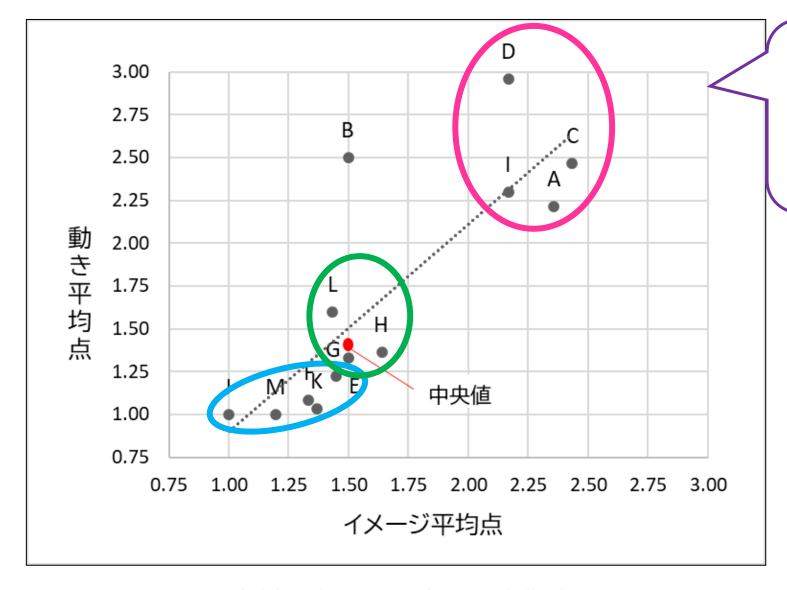
自分なり対象者群

定型的対象者群

どちらでもない群

群ごとの 特徴と 差異を 比較考察

4-1 結果:全体の結果



全対象者の平均点の得点散布

イメージの側面の得点と 動きの側面の得点には 正の相関関係がある (y=1.2119x -0.3102)

自分なり対象者群

対象者A, C, D, I

定型的対象者群

対象者E, F, J, K, M

どちらでもない群

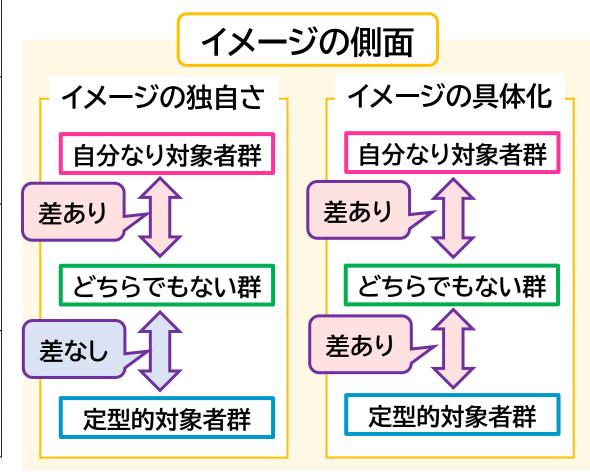
対象者G, H, L

4-2 結果:自分なり/定型的な身体表現をする傾向にある対象者群の結果

イメージの側面・動きの側面の観点ごとの多重比較検定

観点	群(I)	群(J)	平均値の差 (I-J)	標準誤差	有意確率	95% 信頼区間	
		11十(3)				下限	上限
イメージの 独自さ	自分なり	定型	0.9 **	0.154	0.000	0.468	1.312
		どちらでもない	0.80 **	0.162	0.002	0.357	1.247
	定型	自分なり	-0.9 **	0.154	0.000	-1.312	-0.468
		どちらでもない	-0.09	0.154	0.839	-0.510	0.335
	どちらでもない	自分なり	-0.8 **	0.162	0.002	-1.247	-0.357
		定型	0.09	0.154	0.839	-0.335	0.510
	自分なり	定型	1.15 **	0.138	0.000	0.771	1.526
イメージの		どちらでもない	0.74 **	0.145	0.001	0.338	1.133
	定型	自分なり	-1.15 **	0.138	0.000	-1.526	-0.771
具体化		どちらでもない	-0.41 **	0.138	0.033	-0.790	-0.036
	どちらでもない	自分なり	-0.74 **	0.145	0.001	-1.133	-0.338
		定型	0.41 **	0.138	0.033	0.036	0.790
	自分なり	定型	1.42 **	0.241	0.000	0.758	2.077
		どちらでもない	0.85 *	0.254	0.019	0.150	1.541
動士の亦ん	定型	自分なり	-1.42 **	0.241	0.000	-2.077	-0.758
動きの変化		どちらでもない	-0.57	0.241	0.090	-1.232	0.087
	どちらでもない	自分なり	-0.85 *	0.254	0.019	-1.541	-0.150
		定型	0.57	0.241	0.090	-0.087	1.232
動きの確かさ	自分なり	定型	1.41**	0.251	0.001	0.721	2.096
		どちらでもない	0.72	0.264	0.052	-0.005	1.444
	定型	自分なり	-1.41**	0.251	0.001	-2.096	-0.721
		どちらでもない	-0.69 *	0.251	0.049	-1.377	-0.002
	どちらでもない	自分なり	-0.72	0.264	0.052	-1.444	0.005
		定型	0.69*	0.251	0.049	0.002	1.377

自分なり対象者群,定型的対象者群, どちらでもない群の各観点の平均点を Tukeyの多重比較によって分析 (IBM SPSS statics25)

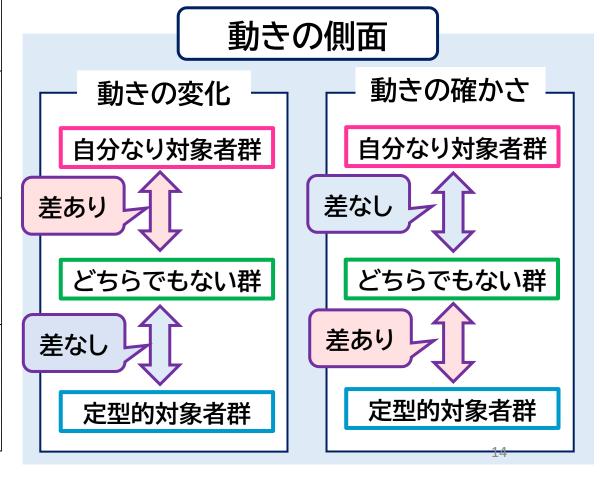


4-2 結果:自分なり/定型的な身体表現をする傾向にある対象者群の結果

イメージの側面・動きの側面の観点ごとの多重比較検定

観点	群(I)	群(J)	平均値の差	標準誤差	有意確率	95% 信頼区間	
		有+ (J)	(I-J)			下限	上限
イメージの 独自さ	自分なり	定型	0.9 **	0.154	0.000	0.468	1.312
		どちらでもない	0.80 **	0.162	0.002	0.357	1.247
	定型	自分なり	-0.9 **	0.154	0.000	-1.312	-0.468
		どちらでもない	-0.09	0.154	0.839	-0.510	0.335
	どちらでもない	自分なり	-0.8 **	0.162	0.002	-1.247	-0.357
		定型	0.09	0.154	0.839	-0.335	0.510
	自分なり	定型	1.15 **	0.138	0.000	0.771	1.526
		どちらでもない	0.74 **	0.145	0.001	0.338	1.133
イメージの	定型	自分なり	-1.15 **	0.138	0.000	-1.526	-0.771
具体化		どちらでもない	-0.41 **	0.138	0.033	-0.790	-0.036
	どちらでもない	自分なり	-0.74 **	0.145	0.001	-1.133	-0.338
		定型	0.41 **	0.138	0.033	0.036	0.790
	自分なり	定型	1.42 **	0.241	0.000	0.758	2.077
		どちらでもない	0.85 *	0.254	0.019	0.150	1.541
動きの亦ん	定型	自分なり	-1.42 **	0.241	0.000	-2.077	-0.758
動きの変化		どちらでもない	-0.57	0.241	0.090	-1.232	0.087
	どちらでもない	自分なり	-0.85 *	0.254	0.019	-1.541	-0.150
		定型	0.57	0.241	0.090	-0.087	1.232
	自分なり	定型	1.41**	0.251	0.001	0.721	2.096
動きの確かさ		どちらでもない	0.72	0.264	0.052	-0.005	1.444
	定型	自分なり	-1.41**	0.251	0.001	-2.096	-0.721
		どちらでもない	-0.69 *	0.251	0.049	-1.377	-0.002
	どちらでもない	自分なり	-0.72	0.264	0.052	-1.444	0.005
		定型	0.69*	0.251	0.049	0.002	1.377

自分なり対象者群,定型的対象者群, どちらでもない群の各観点の平均点を Tukeyの多重比較によって分析 (IBM SPSS statics25)



4-2 結果:自分なり/定型的な身体表現をする傾向にある対象者群の結果

結果のまとめ

自分なり対象者群

すべての観点で定型群に比べ有意に 高得点であり、特にイメージの独自さ においては定型群だけでなく、どち らでもない群との差も大きかった。



特徴

独自のイメージを具体的に想起 変化のある動きをはっきりと行う 特にイメージがその幼児独自のもの

定型的対象者群

すべての観点で自分なり群との差が 見られたが、イメージの独自さ・動き の確かさはどちらでもない群と差が 見られず、イメージの具体化、動きの 確かさの得点の低さが顕著。



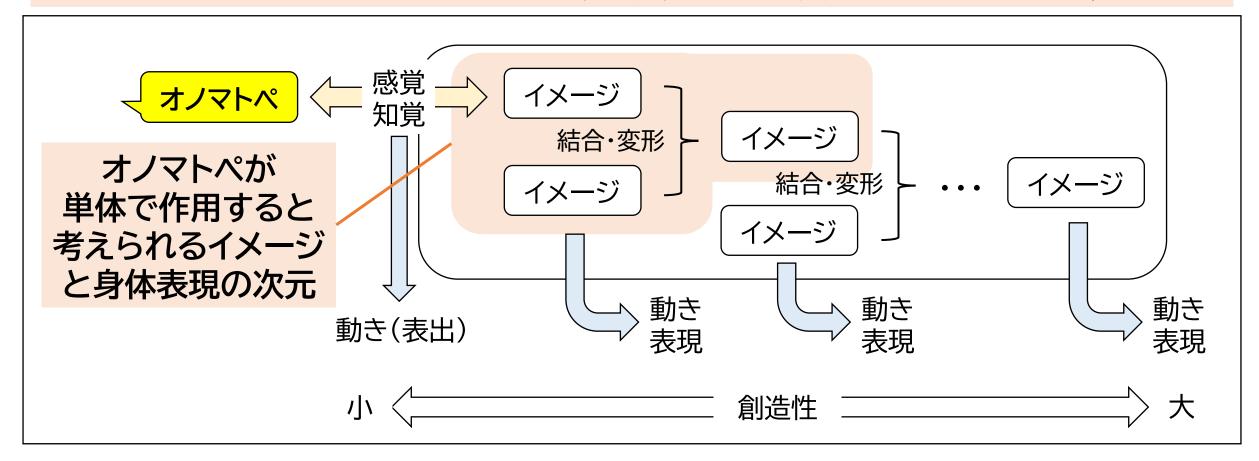


持徵

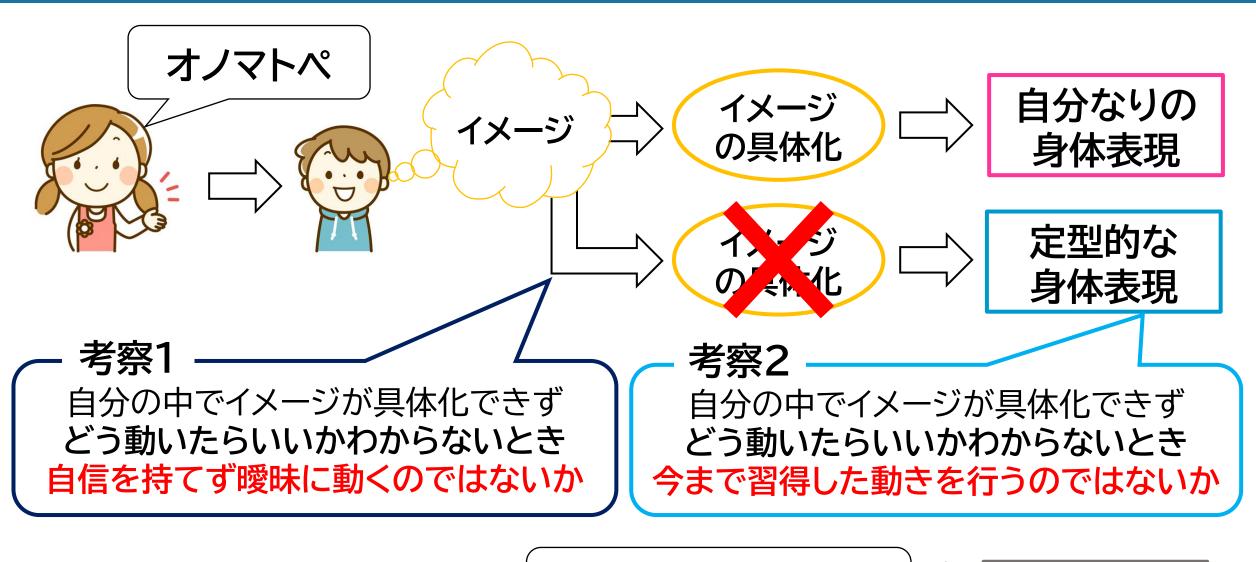
イメージが具体的でない 動きがはっきりしていない

5. 考察

オノマトペが想起させるイメージは感覚・知覚に近い次元のイメージ (村瀬, 2021)



オノマトペが想起させるイメージ自体は感覚·知覚したそのものの印象に近く 具体的ではない可能性が高い



どう動いたらいいかわからない 「OOの 「間違えち

「○○の動きはできない」 「間違えちゃうかもしれない」



動けない

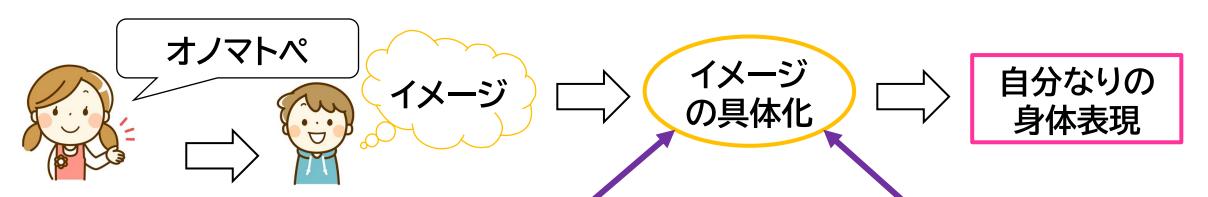
5 考察

子どもの中にあるイメージが言葉で命名されるとき、そのイメージは具体化して固定され、その言葉(名付けられた名)から次のイメージが喚起される(汐見、1981)

「私たちが感性的に捉えた現象を言語化することにより,曖昧な意味は明確な意味へと変貌し,かつ分節化される」(榎沢,2018,p.55)



イメージの具体化には「イメージの名づけ」「イメージの言語化」が有効である可能性



日常の保育

保育者による解釈・言語化

○○って××かな?





子どもによる名づけ

○○は△△だ

本研究の目的

幼児がオノマトペからあらわす「何かになる表現」に着目し、オノマトペに対して自分なりの身体表現をする傾向にある幼児と、定型的な身体表現をする傾向にある幼児の身体表現の差異と特徴を明らかにする。

自分なりの身体表現をする傾向にある幼児

独自のイメージを具体的に想起・変化のある動きをはっきりと行う 特にイメージがその幼児独自のもの

定型的な身体表現をする傾向にある幼児

イメージが具体的でない・動きに確かさが見られない

自分の中でイメージが具体化できずどう動いたらいいかわからないとき 自信を持てず曖昧に動くのではないか/今まで習得した動きを行うのではないか

どう動いたらいいかわからない 動け

動けない

引用参考文献

- 榎沢良彦(2018)幼児教育と対話 子どもとともに生きる遊びの世界、岩波書店、
- 石川眞佐江(2013)幼稚園教育要領における音楽活動の位置付けの歴史的変遷:領域〈音楽リズム〉から 領域〈表現〉への転換を中心に、静岡大学教育学部研究報告、教科教育学篇,44:97-109.
- Kita, S. (1997) Two-dimension semantic analysis of japanese sentences with a mimetics. linguistics, 39: 419-436.
- 村瀬瑠美・寺山由美(2020)身体表現活動におけるオノマトペが幼児に想起させるイメージと動き:オノマトペの性質・意味内容に着目した実験から、体育学研究, 65:35-52.
- 村瀬瑠美・寺山由美(2021)幼児がオノマトペから想起するイメージと動き:イメージと動きの関係とく自分>概念に着目して. (公社)日本女子体育連盟学術研究, 37:1-16.
- 村瀬瑠美(2021)幼児がオノマトペから想起するイメージとあらわれる動き、令和2年度筑波大学博士論文、下釜綾子(2013)身体表現活動におけるオノマトペを用いた動きとイメージ、長崎女子短期大学紀要, 37:78-83.
- 沙見稔幸(1981)幼児期の文字指導と言語教育をめぐって:イメージとことばの観点から、東京大学教育学部紀要,20:295-307.
- 高野牧子(2018)幼児と母親への「もの」を使った身体表現の実践的研究. 日本女子体育連盟学術研究, 34:31-38.
- この研究は2021年度 私学事業財団 若手・女性研究者奨励金の助成によって行われました。